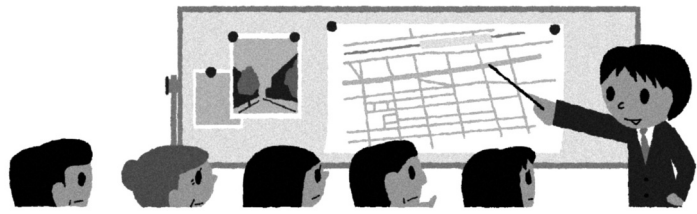


震災から20年、住民の思いとともに再生したまち

兵庫・芦屋市震災復興土地区画整理事業 1996年●平成8年



20年の時を経て

大正十二年、関東大震災に遭遇した谷崎潤一郎は、関西への避難を決める。そのとき最初に滞在したのが、兵庫県芦屋市の知人宅だった。その芦屋を主要な舞台に、谷崎は名作「細雪」を書くが、関東大震災より72年後の平成7年、今度は阪神・淡路大震災が起きようとは谷崎は知る由もない。

この震災による芦屋市の死者は443人。建物全壊が4722棟、半壊は4062棟にも上った。東海道本線と阪神電鉄に挟まれた、店舗と住宅が建ち並ぶ前田町や清水町、そして市場と住宅が密集した茶屋之町と大榭町の一部が、特に大きな被害を受けた。

この年、東京の大学で土木工学を専攻していた横山裕は、震災とは無縁に感じていた。ところが4年後、大学院卒業後に入社したURでの最初の配属先はなんと芦屋市だった。1年目から、震災復興という大仕事に携わることになったのだ。

横山が赴任して16年たったいま、自分が担当した地区を眺めながら

がら当時を思い返す。

「住宅が密集しているので宅地の面積を減らして道路の幅を拡げていく。紙の上で線を引くのは簡単ですが、土地にはそれまで暮らした人たちの思いがありました」

被災後に残った240棟の建物のうち、120棟は移転せず残ることになり、再生への説明に横山は、一軒一軒を回る日々が続いた。

土地に込められた思い

事業の中で、どうしても切らざるを得なくなった、一本の桜の木があった。そこに住むお年寄りが、生まれたときに記念に植えられた、思い出の木だった。他へ移植する方法はないのか、樹木の専門家に聞いて、徹底的に調べた。

だが、木は老齢で、植え替えには耐えられないことがわかる。苦渋の思いでお年寄りに伝えると、桜を生かそうと必死に考えてくれた結果なら、まちのためなら、と理解してくれた。

「土地にはそこに住む人々の思いがこもっています。それに耳を傾け、一生懸命受け止めながら、震災に負けない町をつくりたい思い



もある。両方をみつめながら、住んでいる方たちが落ちついて暮らすにはどうしたらいいか、話し合って模索し続ける日々を送りました」

芦屋で不動産屋を営み、消防団の仕事も務める岸本重男さんは当時をこう振り返る。

「震災当日、本棚の下敷きになっていた息子をまずは助け出して、私はすぐに消防団の詰め所に駆けつけたんです。そうしたら、もう芦屋中の人が、親を、子供を助けてください、とすがって来る状況で、これは大変なことになったと思いました」

岸本さんは、通信手段もない中で、生き埋めになった人を助けるため、被災した町を一心不乱に駆け回った。

芦屋市に居を構える西本商店の中村治郎さんは当時は先のことなど考えられなかったと述懐する。

そして、新卒で芦屋の現場に飛び込んだURの横山裕は、いま、東北・岩手県の被災地の復興に携わっている。「芦屋のまちをいまでも歩きます。嬉しいのは、公園の落ち葉が掃除されていたり、歩道にひび割れがなかったりと、住民の方々がまちを大事にしてくださっているのが分かることです」

阪神・淡路大震災から今年20年の節目を迎える芦屋は、これまでの伝統を受け継ぎながら、新しい付加価値を生み出している。それは、東日本大震災によって被害を受け、いまも復興の途上にある東北の地の目指すべき所と重なる。新しく再生した芦屋のまち。そこにある「いま」は、東北の被災地が東日本大震災から20年後の「あした」を目指す姿と重なっていくだろう。



担当した芦屋市の公園で当時を振り返るURの横山裕

「震災当時は、20年後のこととか、先のこととか考えられへん。いまどうしよう。それだけでした」

当時は考えられなかった、「震災から20年後」を迎えたいいまもお、中村さんは新しくなった芦屋のまちに住んでいる。

「震災前は、隣の家との壁もくっついていて、救急車も入れないようなまち並みやったこのあたりが、震災後の区画整理で一変した。暗いアーケードも思い切ったとっばらって、町が明るくなりました」

強まった住民の絆

「このあたりは、皆昔からの知り合い同士というこぢんまりとしたまちであると同時に、神戸や大阪の都会の風も流れてくる。一度転勤で芦屋を離れても、皆いざれ帰ってくる、それほど住民が愛着を持っていて土地なんです」

そう話すのは、芦屋市茶屋之町の西法寺の上原照子さん。阪神・淡路大震災後は、芦屋の復興計画を住民同士で話し合う、街づくり協議会の副会長を務めた。

「まだ仮設住宅に住んでいる人も、自分たちのまちを今後どう変えていけばいいのか、区画整理はどのように進めていけばいいのか、それを話し合うために勉強会に通ってきていました」